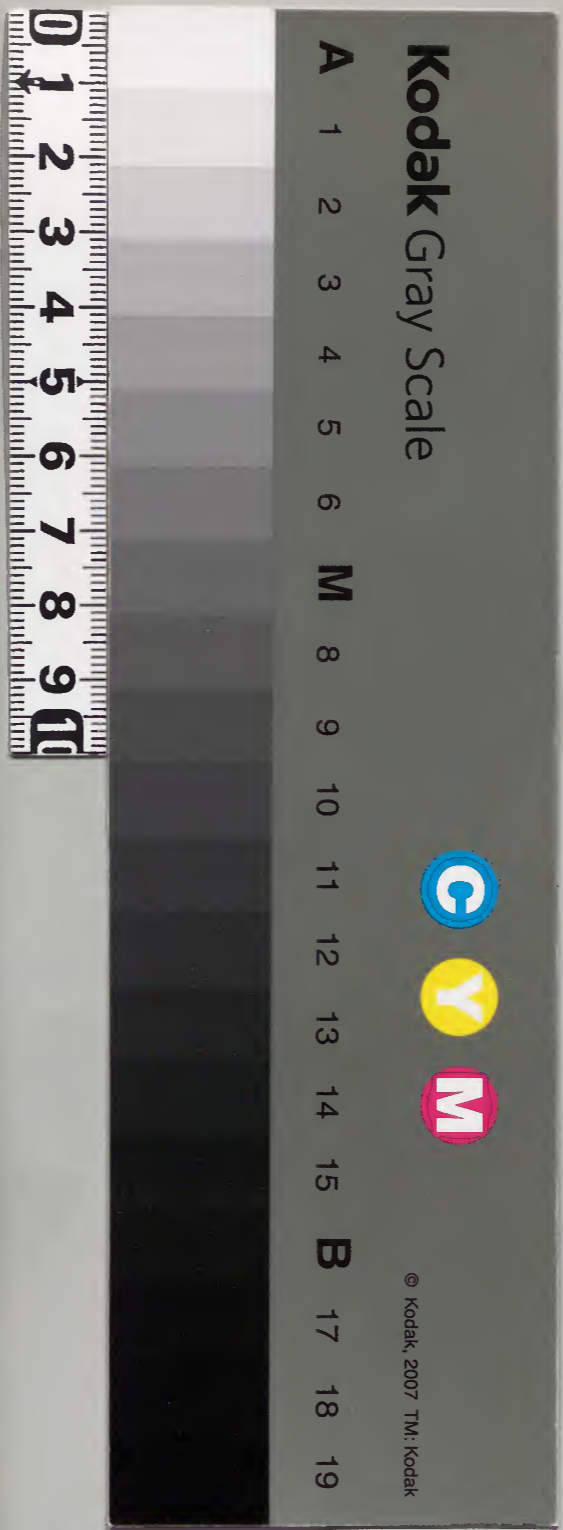


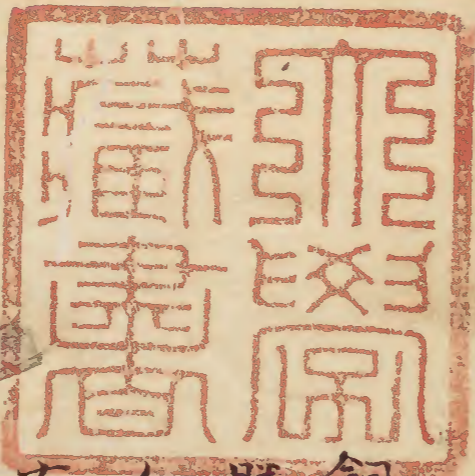
香外古冊

烟
花
鳥
十
七

| | | |
|------|-----------|-------|
| 内閣文庫 | | |
| 番號 | 和 | 17542 |
| 冊數 | 20 (16) | |
| 函號 | 197 | 128 |



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



飼籠鳥部 目錄第十六卷

淺草文庫

勝成裕曰 鷗は大小河のりり人と人志の者ふ
 江のりりりと海と云ふと海鷗
 古人の鷗ハハ江や海や東ハハ編ふ
 人皆白鷗を移すに性思あり如
 人よ道有人と志あり容れりか
 如く一人あり用るるあり可く
 不可もあつ容れ深人そを待
 先とより自然と天地一沙鷗

一 江鳥本草
江區網目

四 海雉本草
海矢藻林

七 鳥雁雁

十 赤雁香祖
雁筆記

十三 雁香祖
雁筆記

十六 鵝雁
鵝雁

十九 鵝雁
鵝雁

二 海鷗本草
海鷗網目

五 海雁雁

八 新瀉雁
新瀉雁

十一 白雁雁

十四 鴻雁
鴻雁

十七 松鳥雁
松鳥雁

二十 魚雁
魚雁

三 海雞臺
海雞臺

六 唐雁雁

九 加利雁
加利雁

十二 天雁雁

十五 酒類雁
酒類雁

十八 寶鴨雁
寶鴨雁

二十一 鬼鳥雁
鬼鳥雁

廿二 鸚鳥本草
鸚鳥網目

廿五 鸚鳥本草
鸚鳥網目

廿三 沖白鳥鳥
沖白鳥鳥

廿六 鴉秋鳥食物
鴉秋鳥食物

廿四 天我鳥飲
天我鳥飲

廿七 駮鳥
駮鳥

飼籠鳥部目錄終

飼籠鳥卷之十六

鷗部 二十種

江鷗 本草
細目

一名鷗 同上

鷗 同上

水鴉 本草
細目

漚鳥 通

江鷗 本草
細目

江鷹鳥 訓蒙
字會

潮鳥 廣東
新語

知機 事物
異名

忘機友 花鳥
争奇

番名

和名加萬目 草葉
集

鴨妻 同上

江信鳥 兼名
ウハミ
中

子コトリ 肥カ
メ佐
前

ハマ子 コ
上
本
牧

ナハシロトリ 近
子
コ
ヤ
キ
上

子コエ井トリ

諸列 さらさら 江河の関より 蝦夷の地より

身一と云西的なるは浮物一或ハ水と云と
羽飛一と鳴く一之形柄のこ一と云と
時ハ人にと呼ぶ也一之形状鶴に似て一と云
又白路多の貌の首より腹下白一背は六
灰白あり形少付ハ管一管長一と云
是云一と雛雀のこ一ト水と云一と云及
蝦と云ハ人とは似ぬよとの事一又捕りて
煮ハ別一所ハ能く一と云一川にあり本草ハ
合流及之味を録一故ハ之の事ハ知
と云一との事一或人云一生息を録

有ハ肉臭一と云と云一と云

本草綱目曰時珍曰鷗者浮水上輕漾如

漚也醫者鳴聲也鴉者形似也又曰生南

方江海湖溪間形色如白鴿及小白雞長

喙長脚群飛曜曰三月生卯羅氏謂青黑

色誤矣一其説ハ了の當と云黒と慘黒の云

る一鳥物ハ黒よ一又白鶴と云ハ其ハ佳

海鷗本草綱目 一名雞臨海異物志 潮雞神異經 信鳥本草綱目

和名沖ノカモノウカモノ ユメ仙臺ゴア佐シホコイトリ豫

流ハ其ハ海と云浮物一と云

るなり一之形状白鷗と一般なり一も
ろよ北有るも南白よ此南一之鳥一戸落
別よとて是れ美らふ神とて西羽黒とて切て雛
のくく庭際よ取て流急の雑物を此よ
与る人よ訓れぬ一有る物とてんやとて呼ぶ
と流急乃て来らる蘭山午系曰鷗とて微く
大あり羽茶褐也潮来の時必と鷗飛とて其
時必とてと聲ゴブくとて潮とて呼聲ありとて
本朝令鑑よ云く又一種大鷗ありとて羽翻面白
相交て斑と作るとてとて是あり

本草綱目曰時珍曰在海者名海鷗
當塗縣志曰鷗詩作鳧鷖鳥青黑白三種白
者多故詩文每レ称白鷗
淮南府志曰鷗青白數種鳧之類多し其説
白と云ハ白鷗より乃て江鷗あり青と云ハ其
海鷗あり黒ハ後よあり
漳列府志曰通志呼潮色蒼似鵠潮至則
鳴風雨輒渝し其説のや潮来るとの群飛して
鳴く神異経曰巨洋海中昇載海日蓋投桑山
有玉雞玉雞鳴則金雞鳴金雞鳴則石雞鳴

石雞鳴則天下之雞悉鳴潮水應之矣
本草綱目曰時珍曰海中一種隨潮往來
謂之信鳥已上の説と考るに臨海異物志
の石雞ハ潮雞云々信鳥云々
正字通曰鷗蒼黑色群飛鳴隨潮往來曰
信鳥知風起輒飛至岸渡海者以爲候
考次も亦信鳥云々

采白祖筆記曰周侍郎標園亮工閩小紀云
鷗皆白獨葦曰九鯉湖鷗作粉紅色一階宦
者劉繼詮獻芙蓉鷗二十四隻色如芙蓉

疑即此種也也あはれ考後ハ江鷗の一種云々
色粉紅と帯るゆゑ也云々自云々
奇種云々の又云々年蝦夷ノ後云々人
云々波の浦中ノ白鷗云々云々
浅紅色と帯るゆゑ也云々
のあはれに芙蓉鷗云々

三 海雞臺灣府志一名

和名豆列諸鳥方言

豆列ノ説云々産云々形状海鷗の類云々
背ハ黒云々此鳥云々海鷗の如く云々

相同し乃十海鰐の一種なり海魚とせりて
吟上鰐虎して海岸の窟中より棲む島人捕り
食するものなり相法海魚とせり相あり
臺灣府志曰海雞母里北月白翼宿海中し
新説とせりなり

四
海雞卓氏

藻林一名

和名カツボトリ豆列

豆列の大島の中より産するものなり大
形白鰐と相似る黒色海魚と浮遊して
白鰐の如く海魚と有り食するものなり

夜ハ山邊の穴窟より多く産するものなり
乃十雞と名を山中人は或捕り食するものなり
海雞母と相同し
卓氏藻林曰海雞如雞而色黒在海中山
上此説とせりなり

五
海雁

関東より希に産するものなり海魚と浮
遊するものなり大なるものなり翅短く
色灰なり頸より環の如く白毛あり
味臭なり食するものなり

唐雁

一名伊与雁

四十雀雁

奥列岩城より名雁あり此列よりあるは
かゝる形状直雁の如く只肩より首より
よりより西傍白四十雀の如く故に俗に四
十雀雁の名ありと云此雁は青野芥と此の雁
形海雁の如く海雁より細法流の雁と相
同しゆ青野芥と此の雁

鳥雁

東海道荒井の海より浮遊と他よりある
はるよりありと云大か加利令の如く肩より首

より海へ深き腹白北月ハ雁と相回し此雁は
是より雁より微弱あり希に細くあり
細法直雁の如くゆ蛤貝の殻をとりて

新泻雁

淮南子曰長頸綠色似鷹は此雁をよし
東国より希にあり佐流の海上よりあり
浮遊する形状多く加利をよしと首ハ
厚より希にゆ小鳥と此の雁

加利金 一名加利

流よりあり同く是れゆり形状直雁の

十

赤雁

香祖
筆記

一名

和名アカカリ

蝦夷の北邊より来るといふ其形状加利金より首より背より赤

十一
白雁

和名ハシカン

和漢
通名

奥より多し予嘗て奥の仙居より見たり
田間より多し直雁と云ふ雁物と雖も
急よ能く走る緑白一月より起る空中より緑ハ
緑ハ分ハ白ハ白と一羽ハ分ハ緑白左右ハ分
ハ又田間より下て遠く緑白一月より
又西より武列の多し其羽の尖所より
總州小梅相州小田原等あり其羽より
あり其羽より始て肥後の那加より一雙より

俗言「奇雁」と云ふ雁は國主有るに拘へしむ
之開東より多きものと云ふは此より奇重
之形状今く去雁あり直雁より少く大あり
總身潔白路をのこしし聲も亦相回し
味も亦上品とも云ふ鴻雁ハ之く烟く
新も卵と云ふものと云ふは獨り奇雁の之く
卵も之を産むと云ふれども二卵より多く
産むるものと云ふは母雞に依りて産むる
新も亦くうんん鴻雁ハ只二卵を産むるもの
亦正しくかかかか雁の亦く烟く

文昌雜錄曰北方有白雁似而少色白
秋深則来

宋孔平仲談苑曰北方有白雁似雁而小
色白秋深至則霜降河北人謂之霜信杜
詩云故園霜前白雁来即此意也此等の
説を以て白雁ハ北方より多きものと和漢相同
此雁の性ハ亦くゆんん本朝食鑑云
關東諸鳥より多し其れ東北より多きあり
本草綱目曰時珍曰今人以白而小者為
雁已上の語と云ふ雁ハ似く小あり

とくや奥州よもりの雁うく大なる雁

雁ハ鴻列の雁
古今詩話曰北方白雁秋深未則霜相降

通雅曰霜降前十日来者曰白雁
沈氏筆談曰北方有白雁似雁而小秋深
乃来如如此中堂是也

乃来如如此中堂是也
乃来如如此中堂是也
乃来如如此中堂是也

十二
天雁

白雁の雌と久しく相つ真の雄
合さる雁の卵と産むを其れ乃俗
天雁とてそ雁う腹白して背より尾
心雁のそ雁う腹白して背より尾

十三
雁

雁 一名鴉 陽鳥 陽雁
候雁 征禽 朝禽 羣我鳥 朱鳥

天厭 僧沙女
羽書使者 阿老安
和名カリ古 二禾子トリ歌

古よりカリと云ハ雲抄よミ聲をカリと訓
今真雁と云法原よ對ミ去ノ字とカクアリ
法州と云秋ハ九月と云クモル云れとも
琉球のミ記南鳥よ部ト云クアリ
又阿蘇陀人シキニデルの流よ北極五十度以上
の地よハ西赤子と云鴻雁接む二十ニ夜以上
の赤道よ通ス所よハ西赤子と云鴻雁の事
アリ云ハミナリト云離と云ミナリハ北云ハ地
方よ流テ産伏と云形加利金よテカクハ
此用脚黄アリとの是れ直の雁あり多ク記

中よ腹白と云ハ腹白と云去ミ記と云クアリ
記と云流ク時ハミ腹黒斑と云クアリ
南北よ記と云クハ早クハ記と云クアリ
あり乃ク宵の記と云クハ早クハ記と云クアリ
刻と云クハ記と云クアリ

禽經曰雁群擣獨敬言夜千百為群有二雁
不瞑以敬言衆也ハ夜ハ此雁先ト飛テ所ト移ス
字典曰徐鉉曰雁知時鳥ハ此記ト具ト云ク
古今注曰雁自河北渡江南瘦瘠能高ト飛
不ハ畏縉綴江南沃饒ト每至還河北體肥不

能高飛恐為虞人所獲又音啣蘆長數寸以防繒繳焉

本草綱目曰時珍曰禽經云鵠以水言自南而北鵠以山言自北而南張華注云鵠鵠並音鴈冬則適南集于水于故字從守春則鄉向北集于山鵠故鄉從又曰雁有四德寒則自北而南止于衡陽熱則自南而北歸于鴈門其信也飛則有序而前鳴後和其禮也失偶不再配其節也夜則羣宿而一奴巡警言晝則啣蘆以避繒繳其智

也而捕者秦之為媒以誘其類是則一思心矣南未時瘠瘦不可食北鄉向時乃肥故宜取之冰凍の如く北地より多し時味美なり
遵化州志曰雁小夏之日北鄉向白露之日南飛此統と常州の人より同乎の如く此意ありて南北の往來を時月よりして異る
及名の主人雁を細心飼へて其數雁往來
その時よりむとて籠中より飛して入る時此雁
第一回より後より地色より白く啄むるを
細心の捕り方り嘗て能く習ひ熟しければ

詩

一名辭羅雀廉州府志

和名ヒシクイエトウジシ

鴻列一はよ秋の月よ多の田間より湖
澤に宿し菱と喰ふ夜よヒシクイの名号あり
こも形似雁よ水田にむもちよ首より栗色の
筋ありて北月よむらこも腹白しつ灰色あり又灰
色ありともゆり考弱よ固らありて類三冠

我々の歌のよ〜〜〜他大雁よ水田に宿し
諸雁と水田に菱と喰ふ夜乃田螺蓮實と食ふ魚
玉篇曰大曰鴻小曰雁

本草綱目曰時珍曰小者曰雁大者曰鴻
鴻大也一本名よ鴻と雁の類名よ入るハ誤あり
鴻ハ乃別よ一類あり

陸機詩疏曰又有小鴻大如鳧色赤白
今人直謂鴻也此鴻と云ハ白雁と云あり
陸氏ハ鳥獸系本よ多の暎一は初よ伝

一名沼太郎マニタラウ

鷓鴣鳥 雅

和名ノカニ

一名野我鳥

本草綱目

駕我鳥上 駟我鳥上

同

蝦夷の比多し多し之形如今之鴻雁
相同し之首より尾之よむく蒼色あり
之他大抵雁之似し味と亦し其類と

松鳥

南越志

一名樹雞

西戎聞見録

和名ヒリカニ

ゲンフ

琉球方言

先年琉球人薩州に持より乃ち琉

予嘗りて其月翌々と蝦夷より水山蒼
黄色黒点あり其皮用て其前羽とあり
其味も貴きものと魚記ゆあり
本草綱目曰弘景曰又有野我鳥大ニ于雁似
人家蒼我鳥謂之駕我鳥又時珍曰大者为鴻
蒼者为野我鳥亦曰駟我鳥亦雅謂之鷓鴣也
其記是れあり

球の流島よあゝ雁のうらとあ侍ふまゝこれ
とも琉球よいつは大坂の弄鳥家か
希よあつと云え来河國よりあつと云ふ
あゝ決せどこも形状雁のこゝろこゝろ
野鴨のやゝ総所様色よゝゝ羽羽共の
えさ六枚星よゝ首淡茶の輪のりや雁の種
よまよゝゝこぞ野のやゝ樹枝よりて水窟
よよゝゝゝは毛よゝ毛籠よゝゝゝ
新と雛をよゝゝゝゝの法未及科子粟
の形よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

南越志曰松島棲息松間不水處宿心以樹
安あゝの琉球のグンホと云ふ松島の産あり
肇慶府志曰松見出四會廣寧棲息松間
琉球の比方のやゝ暖化よゝ産るゆゑあり
西域聞見録曰賀伯克薩里地方有鳥鳥
毛似雞大有勛許味甚美常栖樹抄故名
樹雞鴨綠色似鸚鵡羽可作扇似翡翠但
微冗耳世況の樹雞も小鳥よゝゝ燕雀の
あゝのゝゝのよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
扇と作らるゝゝゝゝ可作扇と云ふ也

寶鴨陽春
縣志

一名鶉詩 獨豹亦雅
翼六

和名アジ越後
方言

町の松島の鴨也人の愛とて海に色あり

北越の地より来る鴨は、落川の軒村と云
よあり水より浮き、又田圃の傍に
このあり、こゝろ、鳥のや、
母雞のや、口の邊より毛の、こゝろ、容貌
甚く、他より異なり、こゝろ、名、獨豹と云
あり、こゝろ、異味あり、こゝろ、肉、嘗て蝦夷
より羽毛と得、こゝろ、以、落川、よ、あり、こゝろ

相回し又一派より肥後より多し、少く、う、右
陸より雁より似、こゝろ、赤、斑、点、風、切、留、用、也
雁の又あり、嘴、尖、雛のや、尾、短、く、雛の
や、尾、色、之、格、及、趾、の、又、蘭、の、譯、訟、
氷、禽、よ、性、と、陸、を、棲、む、能、く、雁、よ、似、て、赤、褐
色、紫、黒、の、斑、あり、首、を、く、尾、短、く、喉、ハ、雛、ハ
似、て、よ、脚、と、鳥、の、似、て、三、距、
後、趾、の、又、水、の、池、の、多、く、雛、ハ、別
と、あり、肉、脂、多、く、味、美、あり、腹、ハ、臭、く、
鳴、く、と、李、子、時、珍、曰、鶉、水、鳥、也、と、云、ハ、誤、り、別

一名... 細法未詳

本草綱目曰時珍曰羅願云鶉有豹文故
名獨豹而訛為鶉也陸佃云鶉性居羊居如
雁有行列故字從𠂔𠂔音保相次也詩云
鶉行是矣又曰鶉水鳥也似雁而斑文無后趾
性不水止其飛也肅々其食齧肥膾多脂肉
粗味美閩語曰鶉無舌无脾或云純唯無
雄與他鳥合或云鶉見執鳥鳥
激... 射之其自脫也
黃縣志曰鶉俗名寶鶉

十九

鶉 鶉 鶉

一名鶉 雅 鶉 音意 鳥思 杜甫 詩 盧 茲 揚州 府志

啟華慶府志曰寶鶉似鳧而小頸有綠毛多
文采各縣水處多有之考阮時珍雁下
似斑文...
陽春縣志曰寶鶉似鳧而小頸有綠毛多
文采

鶉老鳥 飲膳 正要 慈老 正字 通 鶉盧 異名 申物
碧綠公羽 名物 方言 橫魚公 異名 水老鶉 本草 衍義
和名シマワトリ 和名 直鳥 歌 口トツウノトリ 武州 方言
ウカラス 水産 方言

和名抄云大曰鷗茲鳥小曰鷗胡社二名も
あつ字と訓と違ふ鷗の字と宇と違ふ
るも是れよりあつる鳥の音より轉
移して今ハ鷗の和名をひるると云ふ
流別はよ水郷よハ鳥居と明別流はの
城北よハ鴨の古社あり其境内の久杉の梢よ
多く集るるをよと云ふ是れより城後の海
と海魚と街をよと云ふと云ふ千名も
と云ふは是れより名鷗の形多し
是れより城海よ二十餘里あり是れより

三度程よと蓋し直路より二十里より
往來二十里あり一日にこれハ六十里の行
程あり古人言所よ登てるに城海よ向
て飛りよるるの葉の如く是れよと云ふ
と云ふは是れより城後の地よハ常よ極
細れたる大樹あり其の海よと云ふは
と云ふは彼の海よ遠しと云ふは
と云ふは城路のよと云ふは
と云ふは曲て長し是れよと云ふは
上と云ふは或ハ石よりよと云ふハ大樹よ

竊とく久しく樹葉枯死す或列の鳥
林と云所より行り光明と云世門前の古
松城多のあり枝葉枯死しきく
くれハ白しき言のや細法生息と云
て細ありきと細より久しあふり
紀略略記し使鷓鴣没水捕魚と云ハ
上代より細ひしりあり世法中國より
傳きたるあり魚をれも部て倭國より
此法起りたるありや
夷貌傳曰倭國水多陸少以小環掛鷓鴣

項を入水捕魚日得百餘頭則此事信然
世説をれあり

本草綱目曰時珍曰韻書盧與茲並黑也
此鳥色深黑故名鷓者声自呼也又曰
鷓鴣處々求御有之似鷓而小色黑亦如
鷓而長喙微曲善没水取魚日集洲渚夜
巢林本久則求異主多令木枯也南方澳舟
往往麻系云四十令其捕魚杜甫詩家養
鳥鬼頭々食黃魚或謂即此也世説と云く時
神相と杜甫うりて世説と云く日本へ

傳へたる魚一杜りゆは鳥鬼と美しうと
云ふり世りりゆの和祿よりと云傳へたる魚
愛州圖經曰愛州人以鸕鷀捕魚謂之
鳥鬼

揚子異物志曰鸕鷀能沒於深水取魚而
食之不生卵而孕雛於池澤既胎而又吐
生多者七八少生五六相連而出若緒

能沉水多池深より生るるゆ一樹より生る
正字通曰鸕鷀俗慈老人言思之以繩約
其喙才通小魚其大魚不可下時呼而取

之復遺去此用曲如鉤喉熱如湯魚入喉即
爛味不美以此況鳥の佳あり武州の玉川濃
川の收阜是を養ふ小索を以て首項の間
と約して魚と取む一人よて三五相連して
水中と縦横よ歩ゆりてゆりて小索を分
てれとゆりゆりゆり引とてこそ首の索を
つれとゆりて急を以てむ此急極よ蓮の端あり
脂少く味鳥の悪く傳へたる魚一
揚州府志曰盧慈黒色能入水取魚江湖
之間漢人養數十百日可得魚數十斤也

當塗縣志曰鸕鷀亦雅作鷀俗呼水老鴉
嘴曲如鉤喉熱如火魚入則灑澳戶言之
恒箝其頸令不解箝飼之如先飽則不復
取魚骨可治魚骨鯁
陽春縣志曰鸕鷀即水鳥色黑似鷀澳人
蓄以捕魚以繩約其喙才通小魚其大魚
不可下時呼而取之復遺去其頭治鯁及噎
者常以此液吞之老幼彼方亦多
江戶の志玉川あり一人を五匹を使ふあり

二十
魚鱖
本草
綱目 一名

和名シマウ

此列を以て例に作るが如く盧慈と相
同しや一なるを類とく一月の志玉川
所あり是を以て別ありとの使ふは
此類より細いものなりとすなり
唐土の人の使ふハ此を類あるなり
本草綱目曰藏器曰一種頭細身長項上
白者名魚鱖也此液とすは海魚と名小
ハ此を類よりえりてなり

廿一
鬼鳥南産一名

和名スウ即洲 水戸
鳥也

流別名子大海の沖に棲む大凡に吹く時流
流しと追海の舟子行て殺す性愚あり
舟子是と大神宮の使名ありと云はるる
何難船より舟子行て殺す性愚あり
の追海の舟子行て殺す性愚あり
と云はるる思ふに河に吹く大海の沖に
棲む人となれば名よ人と云ふこと
名よ吹く人よ追行て人を殺す事

あし之形状盧茲よお向しと云ふ事あり
色がし淡色と異と聞し何にツと打て化
と異しと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
距き流と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
西海の流人云く初め十五ハ能く能く
行く後十五ハ能く能く能く能く能く
人誰か竿を以て打殺すと云ふ事ありと云ふ事あり
暗多しと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

閩書南産志曰鬼鳥海中此南頭脚俣長
海濱人群掩之直所謂肉味不足當鼎俎

難助不足安尊養可憫甚矣然所以得解
掩者掩其一則不知其所以致大衆俱羅
不知其思乎抑其自毒誤也此説の如し
海中より人と思はるる海際より来れば
衆人群々掩てありと云ふ内味也
これハ食物の好まざるに由り南産志よ
所謂之思ふれあり而安んずる者素より
性愚劣なり如何とあれハ人
海の沖に注ぎ常より人と思はるる者
偶と海際より来ると常と云ふものあり假令ハ

人の狂惑をさうあつた山谷僻
邑の人部りしと思ふあり也素性の愚
劣ゆえに又安んずる海記聞よ云く
仙臺の般一艘寛政六年の三月申酉の夕風で
北方へ吹流され何處ともあれざる般を
初より角里程と云ふ所神圍と云ふ所
比より二百五十里と云ふ所方角より隨て行きて
神圍と云ふ所十九里と云ふ所沖圍と
云ふ所八百里と云ふ所茂早比より海際より
云くハ「ナグ」と云ふ大島に懸りて行く人の馴易く

海鳥ノ般リ相踏多ク有リ是ノ般リ内
 浮いて何リともいへり容子よく般り上を繞
 り舞て羽を揺らさるる如くは吹波の如く
 声よく飛廻り水面も浮在り
 職方外紀曰海鳥有二種其一宿鳥中者
 嘗飛颺海面海船過之則可レ曰海鳥遠近
 其一生長於海中不知登岸船上欲取之
 則以皮布水面以釣着餌置皮上鳥就食
 之輒可釣至若釣無然世既多あり海船
 可レ曰海鳥ノ遠近と云ハ世多し物ありは

廿二

鵲鳥

本草

綱目 一名鷓鴣

同上 白鷓鴣

同上

同上

同上

和名シラブ豆科
大島

豆科の鳥及ハ大島并無人島ノ所
 九月の頃より數百群年々あり海ノ上
 飛遊しハ空を覆ふ雛をわら夏月ハ
 雛を獲りて之を食す其人多ク獲
 人けり其目捕り食すは肉食の如く
 之を食すは其の如く一羽ハ數十羽を
 けり其を食すは其の如く一羽ハ
 けり其を食すは其の如く一羽ハ

鷓あり其種年ハ三卯と及食を卵と
 あり付ハ次年ハ卵よりあり形ハ卵とあり
 りあり其目及て木枝より日乾して
 食し合ふ或ハ卵ハ日用の食より尚ほ
 三物毛ハ編ニ衣服とありあり 三物毛
 鷓瑪子似て又白鷓の 三物毛ハ鷓
 子 總所白ハ三物毛と聞ハ付ハ六七
 毛

本草綱目曰鷓鴣正誤曰一種鷓鴣或作
 鷓似鷓鴣而色白人誤以為白鷓鴣是也

廿三

沖白鳥

一名

此説是あり人誤以為白鷓鴣也此説ハ鷓鴣
 の白と思ハク白鷓鴣と云ハクあり其れ鷓鴣
 の白ハ何ハ別トハ一種の物あり雉ハ雞より
 されとも野雞と云ハクあり
 豆列の太液の佐節液の仲ハ海也
 形ハ白鳥に似ハク其色白ク羽ハ之より
 三物あり又鼠毛あり希ハ淡茶色あり
 是ハ鷓鴣の一種あり其れ皆南海中の
 大鳥あり

天代鳥飲膳

正要

一名 鶺鴒

送 翻

記 卿環

金衣郎

名物 法言

鳥孫公主 卿環 記

和名 ハクテウ

和名抄よ鶺鴒と久々比と洲と久々比ハ
鶺鴒のりあり鶺鴒と鶺鴒と水原と鶺鴒と池と
のり又唐土よて白鳥と云何人路考のり
あり上古ハ白改考白鶺鴒と白鳥と後世
訛らるるなり次鶺鴒即鶺鴒と云なり
諸州昔よその月湖沼の中よ鳥の蝦夷よ
ハ夏月海よて毛と脱りて云

聞東よむも多しとれも牛宿沼と云
るよ鳥のりあり鶺鴒と鶺鴒と水原と鶺鴒と
海と鶺鴒の池と鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と
鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と
とあり總身潔白此鳥足我考のりと夜原と
鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と
あり鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と
西垂地よのりハ衣服の中よ鶺鴒もと
のりと奥蝦夷の鳥よ水よ群集し

之を以て一曰よ集て練の如く一断し
 敷百馱と浮るる とき 赤尻とや時た夏
 月彼の地よとて 雛と為るとる月よ此れハ
 氷海とあり灰日今のやう暖化よ後しや
 べくたり 鶯の類ハ又南海ととて北方ハ
 向ふるあり 於天我るハ北比の多たりや
 たりや 烟法蓮立禰及小魚と昔よそ月
 ハ 鶯ハ夏 因ハ鳥の多りや
 師曠禽經曰鶯鳴喏々故謂之
 陸機詩疏曰鶯羽毛光澤純曰似鶴而大

長頸肉美如雁 於肉法本草のよ 之毒と
 又之毒と為るとるを云りや 於肉
 今よりれハ 鬃髪をぬぐ 惡疾の形とわたり
 ありけ 於肉大熱物あり 口内の毒殺の性
 多 老腹中 小熱物と今よりれ 血を
 却 換儀と 新ありあり 於肉よ 毒は
 ありふよ 河 於腹中の毒 所 於れハ
 あり 凡り 水鳥ハ 皆熱物あり 於 鶺鴒 獨り 熱物
 河 本草綱目曰 時珍曰 僧徒貝寧云 凡物大者
 皆以天名 天者大也 則天我名 義蓋亦 同

此羅氏謂鵠即鶴亦不然又曰鵠大于鴈
羽毛白澤其翔極高而善步所謂鵠不浴
而白一尋千里是也亦有黃鶴丹鵠湖海
江漢之間皆有之出遼東者尤甚而畏海
青鶻其皮毛可為服飾謂之天鵠絨安未飲
膳正要云天鵠有四大金頭鵠似鴈而
長項入食為上美于鴈小金頭鵠形美于小
花鵠多色花一種不能鳴鵠飛則翔鄉音其肉
微腥並不及大金頭鵠各有所產之地
時珍云鵠之類一曰鵠一曰鵠一曰鵠一曰鵠

鵠鵠ハ我々の鵠ハ肉冠の色を云ふ小金頭
我々の肉冠の小句を云ふ花鵠を云ふ羽色の
白相新々を云ふ一様不能鳴と云ふは是れも我々の
類あり也鵠と我々の混一様を云ふは又
又あり我々の類ハ天鵠の類あり
肇慶府志曰天鵠出封川似鵠而大也鵠
是れ鵠の天鵠よりハ大金頭鵠あり
大あり鵠ハ大小あり鵠と云ふは是れハ鵠
秋只寧云凡物大者皆以天名天者大也
則天鵠名美我蓋亦同此也鵠も鵠の天鵠

小野と我鳥の中はたふの鳥よ大我鳥と云ふ
 事と天我鳥と云ふ鳥一鳥よ天者大也と
 即天我鳥ハ大我鳥あり鳥よ大を全と貴あり
 鳥れともめ珍う釋々々天我鳥よ
 鶴の一名と云ふ雜俎鶴即是鶴漢黃鶴下建
 章書況と云ふれハ鶴あり羅氏謂鶴即鶴亦不
 然也然ハ天我鳥あり念内經よ漢と鶴ハ天我鳥と
 事又大和本草泥聞よ鳥よハ黃也のこのありと
 ハ非あり黃鶴と云ふり漢あり又漢の黃鶴と
 鶴あり今ハ天我鳥の雛の黃也ありありハ

廿五

鶉爾雅

一名利子鶉山海經

利牛塗本草綱目

迹河同上

陶河陸機詩疏

淘我同上

鷓鴣同上

浚澤通雅

汗澤三國志

鸚鵡事物異名

駝鶴本草綱目

護田事物異名

水流我廣東新語

涸澤鳥王氏京苑

沙月鳥卿藁本草

采田名レントヤ

和名ガウンテンテウコガラテウ用茶須知續編

之々々 華一船持あり又西海の伴よ希よ
 ありありありと形似蒼我鳥の如く一皮色
 背りとハ緑也尾短くこま背ハ鳥の如くありて
 毛と長く度一足よ蹠ありて黄赤色あり

山海經曰沙水多利牛鴈其名自呼後人轉
為鶉鴈耳

陸機詩疏曰遇水澤卽以胡盛水羣雁涸取
魚食故曰鶉鴈曰淘河俗名淘我多因形也
又訛而為駝鶴陸氏以胡盛水云云後人
以爾雅翼曰鶉鴈水鳥今之鶉鴈

本草綱目曰鳥錫曰昔有久竊肉入河化
為此鳥今猶有肉因名此河又曰鶉鴈大
如蒼我鳥頤下有皮代表容二外物展縮由之
代表中盛永以養魚云身是水沫惟胸前有

兩塊肉一列如拳詩云惟鶉在梁不濡其味
味喙也言愛其喙也時珍曰鶉鴈處有水鳥
也似鶉而甚大灰色如蒼我鳥喙長尺餘
直而且廣口中正赤頤下胡大如數
升囊好羣飛沈水食魚亦能竭小水取魚
俚人食其肉取其脂入藥用翅骨斷骨作
筒吹喉鼻葉甚妙其盛水養魚身是水
沫之說蓋妄談也

閩書南產志曰鶉鴈一名濇澤大如蒼我
頤下有胡囊得魚則畜之以其與鶉相類

而有胡故名鶉鵒一名淘河

陽春縣志曰鶉鵒一名逃河一名淘我鳥形如

鶉而大喙長尺餘頷下胡如數升囊展

編由之水澤中有魚共杼水滿其胡而棄

之水渴魚去乃食之鶉詳于紅鶴下 鶉之共杼水の次

佐領下 鶉之共杼水の次

其 鶉

鶉食物 本草

一名木儿鶉說文

鶉本草 秋鳥細目

杖老古今注

鶉飲膳 本草

鶉細目 青鶉揚州府志

溪教鳥同上

和名乃、トリボウ

先々々々備前乃ふる山の海濱よふふあり

之形鶉のや、一々、灰色より青色とて、

一々、西翼をとり、能く、うへ、

尺條、是も鶉のや、一々、

云、故よ、鶉のや、人、ボウ、

る、カ、ウ、ウ、一々、後、

京師ニ、茶街の、菓肆、

鶉の、首、よ、似、毛、

古今註曰、杖老、秀、秋、

頭、高、八、尺、善、與、人、

本草綱目曰、時珍曰、凡、

鳥頭亦乃如秋鴈又如老人頭童及拄杖之
狀故得諸名又曰赤乃秋鳥水鳥之大者也出
南方有大湖泊處其狀如鶴而大青蒼色
張翼廣五六尺拳頭高六七尺長頸赤月
頭項比白無毛其項皮方二寸許紅色如鶴
項其喙河黃色而扁直表尺餘其喙下亦
有胡袋如鴉鵂狀其足爪如雞黑色性極
令以惡能與人鬪好啖魚蛇及鳥雞詩云有
秋鳥在梁即此自元入我朝帝賦猶有此鳥
鵲之供獻案欽膳正要云此鳥鵲有二種有白

者黑者花者名為胡此鳥鵲其肉色亦不同
也又案景煥之間談云海鳥鷓鴣即今之秀
秋鳥其說與下環氏吳紀所謂鳥之大者亦鷓
小者鷓鴣相合今瀋陽秋鷓鴣或飛來近市人
或怪駭此又同下魯人怪鷓鴣之意此自由不
常見耳

當塗士黠志曰秋鳥水鳥似鷓鴣爪如雞赤目
頭項比白無毛善鬪性合其惡心好啖魚又善食
蝗蝗ハハナコノアリ
字書曰秋鳥音秋水鳥似鷓鴣性合其惡心長頸

目七脚僻水毒好啗蛇俗呼赤丸秋鳥一名拔老

揚州府志曰秋鳥不能沒水終日佇立水中

急流處以伺魚蝦人呼信天公羽以名之

秋名ハ赤丸秋鳥ハハキヨロサギ也

莫蝦と云ふハキヨロサギ也

秋名と云ふハ赤丸秋鳥

廿七

鶺鴒

交列志 音蒙童

一名鶴頂

丹鉛錄

鶺鴒

細目

鶺鴒

學海群玉粹

鶺鴒

酒陽雜俎

海鶴

海語

鶺鴒身

大明編志

越玉鳥

嶺表録

越玉

鶺鴒

序東新誌

和名小ウテウ首之

近來紅毛人等身と物朱らるる所

ハ多譯況より和産物一異國より

出月と云ふは用て器より俗之を鳳

と云白也より瑪瑙の如一方は

赤圍りの稀より之と雨より

品とて用て壁口捺子より

形鶴に似たり物あり

本草綱目曰時珍曰安劉欣期

鶺鴒即越玉鳥水鳥也出九

孔雀喙長尺餘黃白黑色先紫如漆南人
以為飲罍羅山疏云越玉鳥狀如鳥鳥而
足長口勾末如冠可受三升許以為酒罍
極堅緻不踐地不飲江湖不啞百草不食
魚惟啖木葉其異似董陸香曰山人得之以為
香可入藥用揚慎丹鉛錄云鵝鱉即今鶴
頂也

嶺表錄異曰越玉鳥曲頸長足頭有黃冠
如杯用貯水互相飲食衆鳥雖取其冠堅
緻可為酒杯

劍籠身卷之十六終

